

『ファウスト』の歴史的背景

大 畑 末 吉

ゲーテの『ファウスト』に素材を提供した「ファウスト傳説」^{ザイガ}は、學者の説くところにしたがえば、一四八〇年ごろ宗教改革者メランヒトンの故郷に近いクニツトリンゲンに生れ、一五四〇年ごろに死んだ諸國放浪の魔術師ヨハンネス・ファウストなる實在の人物にまつわる古代・中世・ならびに東方の魔術者傳説の集大成されたものである。

このファウスト傳説が、まとまった物語としてはじめて刊行されたのは、一五八七年にゲーテの故郷フランクフルト・アム・マインのシュピース書店から出た民衆本^{フォルクスブッ}である。この民衆本がどういふものであったか、それについてゲーテは『詩と眞實』の第一章で次のように言っている。

「のちに國民叢書とか民衆本とかいふ名で知られて、有名にさえなつた、あのかずかずの書物の出版者、というよりはむしろ工場は、ほかでもないフランクフルトにあったのである。これらの書物は、非常な賣行きのために、ステロ活字でおそろべき吸取紙に印刷され、ほとんど讀み難いばかりであった。こうしてわれわれ子供たちは、幸運にも、これら珍重すべき中世の遺物を、古本屋の戸口の小さい臺の上に、毎日見出すことができ、二三クロイツェルで自分

『ファウスト』の歴史的背景

のものにすることができたのである。」

ここに言う出版者こそ前記ヨハン・シュピースなのである。なおゲーテは以上の文につづけて、當時むさぼり讀んだ本の名をあげているが、そのなかに『ファウスト本』の名は見えない。しかし、當時の人々の趣向に合致し、ゲーテ自身にとっても、ずっと幼いときから、人形芝居や、旅まわりの通俗劇の舞臺で親しんできたファウスト傳説が、民衆本として少年ゲーテの目にふれなかつたはずはない。もっとも、それは前記の一五八七年版の最古の活字本ではなくて、その後數回にわたって書き直され、出版され、一七二五年にいたつて、「キリスト教信徒」という匿名で刊行されたものだろうということである。

さて、私はここで、實在のファウストがどういう經歷の人物であつたか、またファウスト傳説がいかに時代の潤色を経験しつつ十八世紀の中葉にまで至つたか、さらにそれが英國に渡つてクリストファー・マーロウにより戯曲化され、やがていわゆる *englische Komödianten* によつてドイツに逆輸入され、ついに人形芝居となつて人々に親しまれるようになったか、その経路を語るべきかも知れないが、それは諸家の先蹤にゆずつて、今は、ゲーテがファウスト傳説をいかに見たか、いかに取上げたか、また、いかにそれと對決したかという問題に直接はいつてゆこうと思う。さきあげた一五八七年のシュピース書店版の表題は、當時の風習として、長たらしいものであるが、その内容をうかがうのに便利である。

世に隠れなき魔術師にして妖術者なる

ドクトル・ヨハン・ファウストの物語。

彼が一定期間悪魔に身を賣りし次第。

その間、不可思議なる冒険を見聞し

かつ、みずから行いて

ついに、當然の報いを受けし次第。

大むね、彼の遺著によりしもの、

以て、世のすべての大それたる者、

好奇的なる者、神をなみする者らに

恐ろしき見せしめ、戦慄すべき實例、

はた又、誠實なる警告として、

蒐集し、印刷に附したるものなり。

ヤコブの書 第四章

汝ら神にしたがえ、悪魔に立ち向え、

さらば彼汝らを逃がらん。

感謝と特許とを以て

フランクフルト・アム・マイン

ヨハン・シュベース書店版

『ファウスト』の歴史的背景

一五八七年

以上のような内容を持つている「ファウスト傳説」に、若きゲーテが惹きつけられたのは、どういふ點であらうか。それは、G・ルカーチの言葉を借りれば、「この傳説にひそんでいる可能性」である。(Georg Lukács: Goethe und seine Zeit. S. 128)

ファウスト傳説の主人公は悪魔に魂を賣って最後には地獄におちはしたものの、あらゆる學術の蘊奥をきわめて結局満足を得られず、しかも既成の宗教・傳統に安住し得なかつた叛逆兒の悲劇なのである。

その飽くなき知識慾と限りない生の追究の精神こそ、若きゲーテの心を惹きつけたものであった。『詩と眞實』の語るところによれば、すでに少年のころゲーテは「自然の偉大な神、天と地の創造主にして維持者に、直接近づかうと思つた」のである。われわれはまた、ゲーテ少年時代の次のエピソードを思い出す。彼は神をその被創物のうち直接見ようとして、父の美しい漆塗りの樂譜臺を持ち出して、その上にいろいろの天産物をかざり、蠟燭をともして熱心に禮拜した。ところがそのあいだに蠟燭が燃えおちて、赤い漆と花模様の樂譜臺に無慚な焦げ跡をのこして、まるで悪魔の足跡みたいに見えた。「こうした偶然の出來事は、このような仕方て神に近づこうとすることが、そもそもいかに危険であるかを示す暗示であり、警告ともいふべきものであった。」これはまことに、小型のファウストと言えないだらうか。

もっとも、若きゲーテに『ファウスト』制作の直接の動機をあたえたのは、さきにも觸れたように、民衆本ではないらしく、彼が幼年時代に故郷フランクフルトで、のちには大學生としてシュトラースブルクで見た人形芝居であつ

たことは、明瞭である。

その理由の一つは『詩と眞實』第十巻にある、次のゲーテの言葉である。

「人形芝居のファウストの意味ふかい筋は、ふたたび私のうちに、とりどりの音調を發して、なりひびくのであった。私もまたかねて、あらゆる知識をあさりまわったものだが、早くもそうした知識の空しさを思い知らされていたのである。さらに私はまた生活面においてもいろいろの試みをやってみたが、ますます満たされない、苦しい思いをいだいてもどってくるしまつだった。」

つぎに第二の理由として、ファウストのあの有名な獨白

ああ、これでおれは哲學も、

法律も、醫學も、

また要らんことに神學までも……

と、人形芝居の第一幕一場のそれと、非常によく似ていることをあげることができる。

「どこでも笑われるほどまでに、おれは學問をやつた。あらゆる書物を始から終まで残さず讀んだ。そうしてそれでも賢者の石は見つからん。法律學も醫學もみなだめだ。巫術のなか以外に幸福はないのだ。神學の研究がおれに何の役に立ったか。おれが勉強したまままで明した幾夜もの、あがないをだれがしてくれるか。……」(岩波文庫 松尾相譯『フォースタス博士』解説による。)

以上述べてきたことは、若きゲーテの『ファウスト』執筆の動機が、民衆本にあるか、あるいは人形芝居にあるか

『ファウスト』の歴史的背景

ということについてであるが、それはいづれにせよ、この兩者の素材であるファウスト傳説のなかに、いわゆるファウスト的衝動を感じ取ったことは、ゲーテの心の嗅覺の正しさを示すにたりると思う。

なぜなら、ファウスト的衝動は、この傳説のなかに創り入れられた——*hineinziehen*された——フィクションではなくて、この傳説を生んだ當時の社會のなかに生きていて、それがファウスト傳説のなかに可能性としてひそんでいるのである。言いかえれば、そのような旺盛な慾望をいだいている人間が、當時實在していたことを語るものであるからである。

それはいわゆる *Renaissance-Mensch* という人間型である。ルネサンス・メンシュにとつては、生きるということが何物にも代えがたい悦びであった。何物にも拘束されず、自我の命ずるままに動き、あえて罪を恐れない大膽不敵な天才的な人間、しかも飽くことを知らぬ享樂慾に身をまかす人間、このようなのがルネサンス・メンシュである。畫家・自然科学者・音楽家・築城家・建築土木技師を一身に兼ね、*homo universale* とよばれたレオナルド・ダ・ヴィンチに、われわれはルネサンス・メンシュの典型を見いだすのである。

ドイツの人文主義者ウルリヒ・フォン・フッテン（一四八八—一五二三年）は「おお、世紀よ！ 藝術は榮え、知識はよみがえる！ 生きることの悦びよ——*Juvat vivere!*」とさげんだという。

このような気分が、ファウストのあの有名な獨白のなかに吐露されているのである。

世界をその最も奥深いところで統べているものを

これぞと認識すること……（三八三行 育生社版相良譯による 以下同じ）

全人類に課せられたものを、

私は自分の内にある自我でもって味わおう、

自分の精神でもって最高最深のものを敢えてつかみ、

人類の幸福をも悲哀をもこの胸に積み重ね、

こうして自分の自我をば人類の自我にまで拡大し、

結局は人類そのものと同じく私も破滅しようと思うのだ。(一七七五行)

このような生の根源に肉迫しようとする現世肯定のルネサンス・メンシュが、近代精神に直結しないで、十六世紀の民衆本フォルクスラフのなかで魔法使にされ、ついには地獄におとされたという事實は、どう理解したらよいだろうか。それは、そのような人間を生んだ社會に、近代化をはばむものがあつたからではないだろうか。たしかに、このような事實のなかにルネサンス運動の限界が露呈されているのである。すなわちルネサンスの市民社會は、近代社會へ發展する契機を持つていなかったのである。

そもそも、ルネサンス、ならびにルネサンス・メンシュ出現の社會的基盤は、市民階級の勃興がその第一條件であるが、この市民階級の勃興は、さらにさかのぼって、西アジアを舞臺にしたイタリア人とアラビア人たちの交易の隆盛にもとづくものであつた。しかしながら、この東方貿易は、ひとくちに「現銀による胡椒の買付け」という言葉によつて言いあらわされているように、多分に投機的な性格を持っていたのである。

『ファウスト』の歴史的背景

胡椒というものが、當時ヨーロッパの封建貴族や富裕な市民階級の最も珍重する嗜好品であり、したがって東方諸國からの輸入品の宗なるものであったことは、こんにちでもヨーロッパ人の生活における、胡椒とその語の演ずる役割から十分に推察することができる。その一例として、ゲーテが『詩と眞實』第一章のなかで物語っている「笛吹き裁判」^{フライツァー}をあげることができよう。

「笛吹き裁判」というのは、フランクフルト・アム・マインで春秋二季の大市^{メッセ}の際に、市長と諸商業都市代表者との間に行われた儀式である。そのとき、各種の笛が吹奏されたので、この名が生じたのである。この儀式は、ウォルムスやニュールンベルクやアルト・バンベルクの諸都市の使節が關稅免除、あるいは輕減を、皇帝の收稅長であったフランクフルト市長に懇願した往時を記念する一種の祭典であった。その際、使節から市長に贈り物が贈呈された。「嚴格に昔からの慣例に従って要求された、この象徴的な贈り物は、普通は、贈る側の都市が特に多く取引する商品とされていた。しかしながら、胡椒こそ、いわばあらゆる商品代用として認められていたので、ここでも使節は胡椒を、美しくくり抜いた木盃に盛って奉呈したのである。」

このような儀式が一八〇六年まで行われたということは、たとえそれが象徴的な意味しかなかったにせよ、往時の東方貿易において胡椒の持つた意義がいかに大きかったかを示すに十分であろう。

いずれにせよ、もっぱら當時の封建的支配階級の嗜好に應ずる胡椒を主にした東方貿易が、この意味で、勤勞市民階級の生活を豊かにする健全な貿易でなかったこと、したがっていわば脆弱な基礎の上に立っていたことは言いうると思う。

さらに、以上の東方貿易の投機性は、當時の輸送の困難と危険とによって一層強められたのである。南方イタリヤから中歐および北歐にいたる通商路の最難關アルプス越はもとより、地中海の安全度もきわめて低かったことは、シエイクスピアの『ヴェニス商人』のなかのシャイロックの言葉からもうかがわれる。彼はバツサーニオウに、アン・トリーニオウの貿易船の話をして聞かせる。

「あの男はトリボリスへ一艘、西印度へ一艘、船を出している。それになんでも取引所トランザクションでの話じゃあ、今メキシコにも、イギリスにも出しているということだ、そのほか、奴の投資はあちこちに散らばっている。だが所詮、船は板子だし、船乗りは生身だ。陸鼠オランダに海鼠、陸泥棒オランダに海泥棒、つまり海賊じゃな、それもある、それから、水の危険、風の危険、暗礁の危険ってやつもある。……」(中野好夫氏譯)

このほかにもこの作のなかに、なお二三、當時の地中海航路の不安を語っている箇所がある。ルネサンス文化が、ついに貴族文化であるバロックに變質していった原因の最も重要な一つは、以上の點にあるのである。

つぎにファウスト傳説ザイグにおいて、ファウストがルネサンス・メンシェとして發展しなかつた第二の原因として、ドイツの宗教改革が考えられる。

宗教改革はルネサンスとならんで、近代精神の二つの源泉である。両者は古典の復活と聖書の復活とによって、新しい時代と新しい精神とを組織しようとする共通の立場に立っている。しかし、他方では明かに相違する點がある。ルネサンスが一種の文化運動であり、自我の肯定と現世の享樂を主張する、明るい南方的な樂天主義であるのに對し

て、宗教改革は個人の意識を罪なりとし、自我を否定する内省的北方的な精神運動をその出發點とする。十六世紀はかように二大傾向によって動かされていたのである。ゲーテが「青年時代に、いよいよふかく十六世紀のドイツ精神にこころ惹かれた」のも、この醗酵激動の時代が十八世紀の疾風怒濤に似ていたからである。

ともあれ、以上のような宗教改革——とくに一切の幻術を悪魔の所業として否認したルツターのそれ——の精神からみて、民衆本に言われているような「鷲の翼を身につけ、天と地の根柢をきわめつくさんとした」ファウストが、罰せられねばならなかったことは當然である。こうして、實在の「Thomo universale ファウスト」の身邊には、いっしかり墮地獄の傳説がまつわりついていたのである。

しかし、こうした内容のファウスト傳説が、民衆本の形において十八世紀の半ばまで、およそ二百年ものあいだドイツ人に愛讀されつづけてきたということは、そのあいだのドイツ社會が「魔術者傳説」を許容しうる状態にあったことを示すものであろう。

十六世紀に宗教改革ののろしをあげたルツター（一四八三—一五四六年）と同時代人の、畫家デューラー（一四七二—一五二八年）、ニュールンベルクの職匠詩人ハンス・ザックス等の、市民階級出身の人文主義者によって、意氣軒昂たりしドイツも、宗教改革に引きつづく、かつそれとからみあった農民戦争のため、さらに十七世紀にはいつてからは、宿命的な三十年戦争（一六一八—一六四八年）のため、すっかり荒廢に歸してしまった。いわゆるドイツ的（ミゼレ）さここに胚胎した。

それがいかにミゼレなものであったか、當時のイギリス、フランスの情況を一瞥するだけで十分推察されるので

ある。イギリスはエリザベス朝を以て近代の端緒をひらき、フランスではあの傍若無人のラブレール（一四九四—一五五三年）が出て封建制の崩壊を豫言し、封建制から近代市民社会への橋渡しの役を演ずる絶対王制アブソルティスムがその緒につきはじめていた。

いま、この兩國における新時代の暁をつける胎動を、年代記からひろってみよう。

一六二〇年 「知は力なり」と言つたベーコンの『ノヴム・オルガヌム』出版。歸納的方法の確立。

一六二四年 リンシェリユ宰相となり、貴族とユグノーの勢力を打破し、絶対王制アブソルティスムを確立する。

一六三五年 アカデミー・フランセーズの創立。

一六三八年 デカルト『方法敍説』發表。

一六七九年 イギリス、「人身保護律」ヘベス・ユル・プロテクト發布される。

一六八八年 イギリス名譽革命。市民革命の完了。

一七一九年 デフォー作『ロビンソン・クルーソー』發表。

一七二六年 スウィフト作『ガリヴァー旅行記』發表。

一方、ドイツではどうであったか。三十年戦争の結果、人口は三分の一ないし二分の一に減少し、土地は荒廢し、疫病の流行をきたし、ルネサンスに芽生えた新しい精神と産業とは完全に窒息し、道徳は頹廢して、市民階級は没落に瀕した。さらに政治的には、三百六十から四百におよぶ小邦の集合體にすぎず、ドイツという精神的・政治的靱帯は失われてしまった。

『ファウスト』の歴史的背景

このような状態は十八世紀の中葉にいたるまで、影を引いている。そのころ、ドイツ人の六割から七割が農民であり、その農民の八割までが農奴だったという。農奴解放は一八〇七年にいたつてようやく、實現の第一歩をふみ出したのである。しかもそれすらも「結果的にみれば、所期の目的は微妙に歪曲せられ、必ずしも完全な獨立自營農民を創出し得たとは斷じ難いものであった。」(増田四郎教授)

また、前述のようにイギリスでは一六七九年に人身保護律が發布されたのに對して、ドイツでは十七世紀こそ魔女迷信の最盛期で、魔女の拷問火刑が頻繁に行われたという。當時ライプチヒの一法官は二萬件におよぶ魔女火刑の宣告書に署名したといわれる。このような中世的な魔女火刑の廢止は、ゲーテ生誕の前年一七四八年にようやく實現したのである。

以上述べてきたような歴史的背景のうちに、ファウスト傳説は、いろいろの發表形態をとりつつ一世紀半のあいだ傳えられて、ここに十八世紀の啓蒙主義の世を迎えたのである。そしてここに、ファウストは近代精神を吹きこまれて、世界文學のなかに重要な位置をしめるようになったのである。

もっとも、すでに一五八八年、マローウによってファウスト傳説はりっぱな文學作品『The Tragic History of Dr. Faustus.』に昇華され、その主人公も従前のようにいやしい欲望から悪魔と結ぶのではなく、一切をきわめんとする巨人的な人物にまで高められはしたが、それにもかかわらず、フォースタス博士はついに地獄におちいり、コラスはこの高貴な人間をいたむ挽歌をさみしく歌う。

「すこやかに伸びたかも知れぬ枝は切られ、かつてはこの學者のなかに生長したアポロの月桂樹の枝も焼かれまし

た。

フォースタスは去りました。ごらん下さい、彼の地獄落ちを。悪魔に左右せられしその運命は、正しからぬことどもは、ただ驚嘆のみしておくべしと、賢き人等に訓えます。

されど不義なることの深みは、僭越の才子等に、神さまのお許しなきことをもなせと誘うものでございます。」(松

尾相氏譯)

しかしながら、十八世紀の代表的な啓蒙主義者レッシングは、知識欲の無限な衝動は、悪魔の乗すべき間隙とはなつたにしても、それを墮地獄の罪と見なすことは、どうしてもできなかった。ここにはじめて、「ファウストの救い」というモティーフがあらわれたのである。レッシングの『ファウスト博士』は、遺憾ながら断簡に終っていて全貌を知ることができない。けれど、その結末において、レッシングは、天使の群をして悪魔に次のような意味深い言葉を言わせている。

「神が人間に、衝動のうちでも最も高貴なものを授けたのは、人間を永久に不幸にするためではない。」

ゲーテが『ファウスト』に著手したころは、レッシングの計畫については何も知らなかった。のちにそれを知った時には、これという影響をもちや受けることはなかった。

しかし、ゲーテはレッシングと同じ意味においてファウストに救いをもたらしたのではなかった。現に若きゲーテの『ウル・ファウスト』は、救いどころか、全篇が悲劇そのものである。その幕ぎれでは、メフィストの「あの女は裁かれたー」という言葉が冷酷にひびく。

『ファウスト』の歴史的背景

ところが完成された『ファウスト 第一部』では、メフィストの言葉を打消すかのように、天上から「救われた」という聲がひびいてくる。さらに『ファウスト』全篇の棹尾をかざる「だれにもせよ常にいそしんでやまぬ者を、われらは救うことができる。」という天使たちの言葉は、ゲーテ自身エックテルマンに言うところによれば、「この詩句のなかにファウスト救済の鍵がふくまれている」のである。

では一體、ゲーテによってかように救いを保證されたファウストを主人公とする作品『ファウスト』は、何故「悲劇」と銘うたれているのか。

この問題を考えるにあたって、ダンテの『神曲』を例にとってみよう。ダンテの『神曲』が『La Divina Commedia』とよばれる理由について、竹友藻風氏の『神曲』（河出書房版）の解説をつぎに引用する。

「神曲 (La Divina Commedia) という題名は後人の傳えた美稱である。ダンテ自身はこれをただ喜曲 (La Commedia) と稱えていた。ラヴェンナの領主カン・グランデ・デルラ・スカラに宛てた書簡の中に説明しているように、「喜曲」は劇に限られたものではなく、不幸に始つて幸福に終るすべての物語に與えられた中世紀の稱呼を踏襲して、地獄より始つて天堂に終るこの詩の總稱としたのである。」

この論法でゆけば、不幸より幸福へそしてついに天國に終る『ファウスト』も、當然『La Commedia』とよばれるべく、少くとも「悲劇」という名稱は度ぎつゝいことではないだろうか。言いかえれば『ファウスト』における、救いと悲劇との矛盾はどう解釋したらよいのか。

われわれはここに啓蒙主義をアウフヘーベンして前進したゲーテの精神の成長を見ることができるのである。その

第一の契機となったのは、ヘルデルとの邂逅である。彼がゲーテにおよぼした最も重要な影響は、發展の思想である。すなわち、ヘルデルは物の見方に歴史性をあたえ、辨證法的な歴史の認識を主張した。人類の歴史の進展は、それに内在する矛盾の辨證法的な過程において實現してゆくという信念は、とくにゲーテに決定的な感化をあたえた。

メフィストの言葉

「常に悪を欲して、しかも常に善をなす、あの力の一部です。」

天上の序曲の主の言葉

「人間は努力するかぎり迷うものだ。」

「善い人間は、よしんば暗い衝動に動かされても、

正しい道を忘れてはいないものだ。」

これらの言葉は、いずれも人生における悪のゲーテ的解釋であり、その正當な意味は、辨證法的に讀みとらないかぎり把握できないであろう。

さて、人間個人に内在する矛盾、善と悪との對立から、ゲーテの觀點は社會に内在する矛盾に移ってゆく。それと同時に、『ファウスト』の舞臺も、第一部のファウスト個人の罪の世界、すなわちメフィストのいう小世界から、第二部の對社會的行動と罪の世界、すなわち大世界に移る。

ゲーテの視野をこのようにひろげたのは、ワイマル移住以後の彼自身の體驗と、フランス革命をふくむ世界の動きとである。これらはいずれもゲーテの人生觀・世界觀に重要な影響をあたえたことは言うまでもないが、『ファウスト』の歴史的背景

ト」そのものには直接に感化をおよぼしているわけではないから、それを一一詳述することは、今の場合その必要はないであろう。ここでは要約にとどめる。

ゲーテがワイマルの「啓蒙された君主」のもとでなめた行政的體驗は、彼に政治的改革は「上から」くるものでなければならぬ、變化は漸進的でなければならぬ、ということを教えた。イタリア旅行は古典的な調和と秩序の意義を身を以て體驗せしめた。さらにその前後に没頭した彼の自然科学研究は、自然界においても飛躍ではなくて漸進的な移行が支配していること、暴力的な飛躍的變化は自然の法則に反することを教えたのである。

こうした精神状況にあったとき、フランス革命の飛報がもたらされた。しかし彼はワイマル宮廷人のようにバステューの狼煙によって不意打を食いはしなかった。むしろ、フランス革命を最も早く豫感した人の一人だった。それは彼の『年代記録』にある次の言葉に徴しても明かである。

「すでに一七八五年に、頸節事件によって言いあらわしがたい印象をあたえられ、この事件において示されたふしだらな都會、宮廷、國家などの深淵のうちに、最も戦慄すべき結果が幽霊のように姿を見せているように思われて、長い間私はその幻から逃れることができなかった。その際私の態度が普通とはかわっていたので、その最初の報道が手もとに達したとき、ちょうどいっしょに田舎に滞在していた友人たちは、ずっと後になって革命が勃發しても相當の時日が過ぎてから、そのころの私が氣でも狂っていたように皆に思われたと打明けたくらいだった。」

ゲーテはフランス革命の歴史的意義を十分に認めていた。反革命同盟軍に屬したワイマル公はフランスに出陣し、ゲーテもあとからそれに従った。このとき、革命戦争に一轉機をもたらしたヴァルミーの敗戦の夜、陣營にかがり火

をかこんで意氣銷沈している士官たちに彼はあの有名な豫言をした。

「ここから、そして今日から、世界歴史の新しい時期エポックが発する。そして、諸君はそれに参加したということができるのだ。」(『フランス出征』)

フランス革命の皮相の現象におびえて、その意義を頭ごなしに否認するワイマル宮廷の反動的な人々に對しては『ヴェネチア寸鐵詩集』のなかで次のように一矢をむくいている。

あの人たちは狂つていると、諸君は激しい辯舌者たちのことを言う。

フランスの街頭や廣場で大聲にさげぶ人々のことを。

私にも彼らは狂つているようにみえる、だが自由のなかの狂者は

賢明な言葉を語る。しかし、ああ、叡智も奴隸のなかでは沈黙する。

しかしながら、「穩當な自由主義者」ゲーテの革命觀は、上述のように、どこまでも漸進的な移行を意味する「上からの革命」觀であった。

フランス革命に取材した作品の一つである『激昂せる人々』のなかの伯爵夫人は、「下層階級の革命的叛亂は上層階級の不正の結果です。」と言つてゐるし、ゲーテ自身もエッケルマンに次のように言つてゐる。

「いかなる革命も國民の罪ではなく政府の罪だと信じていた。政府がつねに正しく、注意をおこたらず、時宜になつた改良をして國民の意を迎え、下から必要が強いらるにいたるまで抵抗しなかつたら、革命は全然おこらないだろう。」

『ファウスト』の歴史的背景

ファウストが第二部の第一幕「皇帝の宮城」の場で行う國家救濟策は、あたかもフランス革命前夜を思わせるものがある。國家財政の破綻状態にもかかわらず、宮廷人は華美な祝祭と贅澤な宴會に日を送っている。一般人民の窮乏の上にあぐらをかいている僧侶と騎士階級は、新しい時代の批判精神を極度にきらって、宰相の口をかりて次のように言っている。

自然と精神——それはキリスト教徒にいうべき言葉じゃない。

そういう言い草は極めて危険なので、

無神論者を焼き殺すことにもなるのだ。

自然は罪惡であり、精神は惡魔である。

この二つのものが一緒になると、

懷疑という不具のあいの子を生むのだ。

われわれはそんなものはごめんだ。——この古い帝國には、

二つの氏族ができていて、

それだけが帝位を守護し奉っている。

即ち聖職者と騎士とがそれである。

彼らはどんなあらしにも堪えて、

その報酬として寺院と國家とをゆだねられている。(四九〇七行)

この宰相に對してファウストとメフィストは近代精神を代表している。しかし腐敗しきったアンシャン・レジームに、近代精神はまず破壊的な作用をおよぼす。メフィストの魔法で發行された不換紙幣は、フランス革命時代のアッシニャ紙幣のように、一時の急場はしのげたものの、國家の頽勢を挽回することはできなかった。

ここに語られているかすかすの場面には、ワイマル公國においてのゲーテの行政的體驗や、フランス革命についての見聞が看取されよう。そして、ファウストの建設しようとする自由の國は、じつにこのような歴史的背景を持っているのである。

ゲーテの炯眼は、フランス革命以後、世界の動きにひろく深く徹していった。いたずらに同胞のショーヴィニストたちの敵愾心に雷同することなく、先進國イギリス・フランスの歴史と動向とに注意をはらっていた。ゲーテの自由戦争に對する冷淡な態度と、ナポレオン崇拜とは、このような世界史的推移の洞察から生じたものと理解されなくてはならない。

ゲーテは當時を回想してエッケルマンに言っている。(一八三〇年三月十四日)

「憎悪がないのにどうして憎悪の詩がつけられたろう。内密だが、わたしはわれわれがフランス人たちから自由になった時には、ありがたいとは思ったけれども、フランス人を憎んではいけない。事實、文化と野蠻とのみを問題としているわたしに、地球上の最も文化のすすんだ國民の一であり、また、わたし自身の教養の大部分を、その國のおかげをうけている國民をどうして憎めたらう。」

こうして十八世紀から十九世紀へと、たゆまず生き抜いてきた「穩當な自由主義者」老ゲーテは、實際的なイギリス

ス人を讚美し、「新進の國」アメリカの未來の繁榮を豫言しつつ、若い資本主義社會の發展を豫想した。しかしながら、資本主義によって促進せられる市民社會の發展のうちには、矛盾が内在していることをも、彼は見のがさなかつた。第五幕のフィレモンとパウチス老夫婦の、神に歸依した平和な牧歌的な生活が、ファウストの個人的な善意にもかかわらず、メフィストの資本主義的本能の餌食となつて、無慚にも業火のうちに滅びなければならぬ、この悪しき必然性は、ファウストに第一部の世界では見られない罪の意識をあたえる。

ファウストは今やメフィストを助手として、土地を開拓し、新しい自由の社會の建設をはじめ。メフィストの指揮する大商船隊は四方の海に雄飛して巨大な富をはこんでくる。

メフィストは言う。

「自由な海は精神を自由にする。

海に出りゃ思案のことなんぞ、だれが知るものか。

海では早くつかむにかぎる。

魚をつかまえるように船をつかまえる。

まず三艘の船の主人になれば、

四艘めは、とび口で引きよせる。

すると五艘めは災難だ。

力がありゃ權利もある。

何をつかむかが問題だ、

どうしてつかむかは問題ではない。

航海を知らぬのならともかく、

戦争と、貿易と、海賊とは

三位一體でわけられはせぬ。」(一一一八八行)

このメフィストの豪語は、若い時から海賊となつてスペインやアメリカの通商路をおびやかし、一五七七年からマ
ガリャエンスについて最初に世界一周の航海にのぼり、その途中南アメリカ西海岸のスペイン領を荒掠し、ついに、
一五八九年にスペイン無敵艦隊を破って新興資本主義國イギリスの興隆の契機をつくつたドレークを想起せしめない
だろうか。

以上述べてきたように、矛盾をふくむ新しい世界のなかにあつて、ゲートは人類の明るい未來を望み見たのである。
そこはもはや、メフィストの魔術を必要としない、言いかえれば、人類共同の努力によって無限に生産力の進展する
自由の社會である。この理想に向つて、自由の土地の上に、同胞と共に自由のために戦いたいという願望が、ファウ
ストの最後の獨白にあらわされている。

「そうだ。この考えにわしは歸依する。

知恵の最後の結論はこうだ、

生活でも自由でも、これに値する者は、

『ファウスト』の歴史的背景

一橋論叢 第三十一卷 第三號

それを日々に獲得してやまぬものだけだ。

だから、ここでは、危険にとりまかれて、

子供も、おともも、老人も有爲な年をすごす。

わしもそういう人の群を見て、

自由な土地に自由な民とともに立ちたい。

その時は、瞬間に向つてこう言つてよいだろう。

とどまれ、お前は實に美しい！と。

わしの地上の日のあとは

永劫ほろぶことはあり得ない。

そういう高い幸福を豫感して

わしはいま最高の瞬間を味わうのだ。」(一一五八六行)

これは悪魔の原理に對する、ファウストの斷乎たる、決定的な、しかしながら、主觀的な拒否である。われわれは、ファウストのこの獨白を以てメフィストに對する勝利の宣言であると簡単に解釋してはならない。ファウストは、はたしてメフィストに現實の世界で終局的に勝つたといえるだろうか。もしそうならばメフィストの

「最後のくだらぬ、うつろな瞬間を

このあわれな男はしっかりとつかまえようと願う。」(一一五九〇行)

という言葉はどう解したらよいだろう。また、もしそうならば、ファウストの言葉のはしはしにある、「立ちたい」、「こう言ってよいだろう」、「高い幸福を豫感して」などの、いささか心もとない可能法的表現はどう解したらよいだろう。

しかし、これでよいのだ。ファウストは現實の世界で終局的に勝ってはいないのである。ファウストのこの世における一生は結局、悲劇に終わっているのである。もしかりに、ファウストが現實の世界において勝って、かくかくの土地に、かくかくの國を建設したとするならば、『ファウスト』全篇は單なる一篇のユートピア物語になってしまうだろう。

ゲーテの時代、ゲーテの社會においてまだ解決の不可能な矛盾、それを彼は矛盾として提示したのである。であればこそ、『ファウスト』が常にプロブレムとして潑刺たる魅力にみちて、われわれの關心を引くのではないだろうか。しかも、その矛盾のため、また生涯の伴侶メフィストのため、ファウストの人間性はいささかもそなわれず、盲目の老ファウストの心眼はいよいよ冴えて、人類の未來に對する明るい希望をわれわれにあたえてくれる。ここにこの作の偉大さがあるのではなからうか。

(一九五四・一・一三)